論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※　　第　　号

氏　　名　Median Mutiara

論　文　題　目

Boundary Work of Everyday Domains in Migration: A Sensory Ethnography of Nikkei Manadonese in Oarai (NiMO)
（移住における日常領域の境界作業―茨城県大洗町在住日系マナド人（NiMO）の感覚民族誌）

論文審査担当者

主査	名古屋大学	教授	東村 岳史
委員	名古屋大学	教授	島田　弦
委員	名古屋大学	准教授	日下　渉

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

１．本論文の構成と概要

本論文は茨城県大洗町在住日系マナド人がインドネシアから 1990 年代以降渡日し、同地において農水産物加工業に従事し、周囲の日本人との交渉を重ねながら定着していく過程を感覚民族誌（sensory ethnography）の手法を用いて記述・分析したものである。これまで日本に滞在する移民についての研究、特に在日日系人（ブラジル人など）に関しては多大な蓄積が見られるが、その多くは同化圧力とそれへの従属もしくは対抗、あるいは多文化主義との関係といった枠組みで議論されており、移民自身の五感に基づく研究はほぼ皆無といってよい。本研究は、著者の長期に渡る滞在期間中に行なわれた詳細なフィールドワークの記録により、日系マナド人が職場に適応し、また自分たちの居場所を主としてキリスト教会に定め、日本人からの不快な言動と交渉しながら主体性（agency）を獲得していく様態を具体的に描き出したものである。

本論文は全８章からなる。第１章は研究課題を設定し、方法論や研究の意義などについて説明する。日系マナド人の歴史的背景、先行研究に照らした本研究の独創性、研究上の問い、調査対象者のプロフィール、論文構成などが述べられる。

第２章と第３章は先行研究のレビューで、第２章では移民の日常生活領域（everyday domains）に焦点を当てることの重要性が述べられる。移民が職場とそれ以外の領域を往来する境界作業（boundary work）の動態を捉えるために、文化人類学におけるダグラスの浄―不浄概念、社会学におけるゴフマンの自己呈示に関する議論の枠組みを批判的に検討し、著者自身の視点を設定する。

第３章は移民研究と感覚民族誌に関する章で、移民と著者自身の五感を活用して日々の生活実感をとらえるための方法について検討する。他のフィールドワークの手法と感覚民族誌という手法を比較し、その特徴とこの手法の本研究における有効性を主張する。また、著者の立場性（ポジショナリティ）、著者と調査対象者との力関係などを考察しており、ここまでが導入部分に当たる。

第４章から第７章までが著者のフィールドワークに基く本論文の中心部分である。第４章は日系マナド人が大洗に定住する歴史を追跡する。戦前スラウェシに彼ら・彼女らの先祖である日本人が移住し、戦後長い空白期の後、1990 年代以降渡日した理由や、他の移民集団との関係において日系人アイデンティティを意識するに至った経緯が描かれる。来日当初は他の非正規移民と職場で競合関係にあった日系人たちが、やがて日系人というステイタスの優位性を認識し、アイデンティティを確立していく道筋を叙述する。

第５章は日系人が干芋加工や魚介類加工に従事し、3K 仕事にいかに適応していくのかが論じられる。彼ら・彼女ら自身が五感（味覚、臭覚）を通して仕事を「汚い」と認識する過程が著者自身の工場におけるフィールドワークによって追体験され、実感的に記述されている。また、日本人上長が優位に立つヒエラルキーの中で日系人が職場に役割適応すると同時に、3K 仕事により「汚染」された身体および自意識を「浄化」するという境界作業を行なう工夫を詳述している。

第６章は教会における活動を扱う。3K 職場とは一転して信者たちが「浄化」された領域においてコミュニティをいかに形成していくのかを論じている。故郷のマナドにおける慣習を部分的に受け継ぎながら、条件の異なる大洗において、建物の確保、教会組織の構造や要職者の選出、食事会の運営など、教会での具体的な活動を元に仲間意識を醸成する様態を活写している。

第７章は日系人の住居と近隣の日本人との関係を論じている。日系人の存在を「騒音（noise）」と

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

して異物視する日本人は日系人を排斥する意識を露にし、それが日系人の生活音を「騒音」としてクレームをつけたり立ち入り禁止のサインを勝手に設定したりする言動となって現れる。その意味では住居は必ずしも安全地帯ではなく、浄―不浄の境界域として位置付けられる。また、日系人の視点から見れば、「騒音」を発し「うるさい」のは日系人ではなく日本人の側であり、日本（農村）社会への批判がうかび上がる描写となっている。

第８章は結論として前章までの議論を総括している。著者は、移民の異なる領域（住居、会社、教会）間の移動を感覚民族誌によって体感的に描き出し、彼ら・彼女らが置かれた社会構造の制約の中で移民たちが採用している適応戦略を複合的に分析した。これはこれまでの移民研究と感覚民族誌が行なってきた狭い範囲での検討を拡大するものであり、浄―不浄研究、感覚民族誌、日系人研究、移民研究における貢献を提示し、本研究の限界を述べて締めくくっている。

本論文の中核部分が２編の学術論文として公刊済みである。

２．評価

本論文は以下のように学術的に評価できる点を含んでいる。

（１）移民研究において、特に日本在住の移民を対象としたものでは比較的新しい感覚民族誌という手法を用い、移民の複数の五感（味覚、臭覚、聴覚）を生き生きと描写し、彼ら・彼女らの体感とそれを生み出す（農村）日本社会の構造を分析することに成功している。当該分野における先駆的事例研究として高く評価できる。中でも複数の感覚、また複数の領域（住居、職場、教会）間の境界作業を扱い、これまで当該分野では限定的な考察にとどまっていた領域を拡大したという点で、未開拓な部分に踏み込んだ研究といえる。

（２）蓄積の多い他の日系人研究と比較し、日系マナド人の社会適応やアイデンティティの独自性を解明している。先行研究では短期間の表面的な調査にとどまっていた彼ら・彼女らの大洗での集住化の過程を掘り下げるため、戦前の植民地時代から現在に至る時期をカバーし、当初は希薄だった日系人意識が明確化される過程が他の移民集団との関係において分析されている。

（３）日系マナド人の事例研究としてのみならず、他の移民研究にも応用できる知見を含んでいる。都市と農村における移民の社会適応の違い、日本国内外における他の移民コミュニティとの比較、移民の宗教活動の重要性など、対象集団や地域の限定を超えて参照される興味深い論点を提示している。

ただし、以下のような不十分な点も指摘された。

（１）感覚民族誌はインパクトのある調査手法ではあるが、未整備な部分を残す手法でもあり、他の手法と比較して何がメリット、デメリット、限界なのか、議論を洗練する余地が残されている。

（２）著者が調査対象者の五感を生き生きと描写している長所の裏返しとして、彼ら・彼女らの実感が本質主義的に響き、本論で併用される社会構築主義との間に齟齬が生じている可能性がある。調査対象者の主体性を尊重しながらも研究者としての批判的な見解を担保するという繊細な課題が著者には残されている。

（３）境界作業を行なう日系マナド人のエイジェンシーは、教会という「逃げ場」を作ることで、移民たちを搾取する日本社会の構造が破綻するのを防ぎ、逆説的にも現状維持を存続させる役割を果たしている可能性がある。しかし、そうした構造的な分析が十分に展開されていない。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

もっとも、これらは本研究の博士論文としての価値を損なうものではなく、今後の研究課題として克服が期待されるものである。

３．結論

以上の評価に基づき、審査員一同は一致して、本論文を博士（国際開発学）の学位を授与するに値するものと判定した。